

SORA

web magazine 2019.may. vol.109

「2度目のアンボン」に行きたい！

昨年、初めて取材した際にとても気に入ってしまったアンボンの海。カラフルな海底景色に、様々な生き物たちが素晴らしいモデルを務めてくれる。かなり写真の撮りやすい海で、一度しか行ってないのに、私は最新の写真集にアンボンの写真をたくさん使用した。アンボンから出航する、噂のバンダ海クルーズの取材依頼があった際に、「もう一度、アンボンで取材&撮影がしたい!」と私は願い出た。2度目のアンボン。前回同様、マルクリゾートに滞在して、3日間のダイビングを Dive into Ambon でお世話になった。

Travel

Ambon Indonesia

Photo & Text : Yasuaki Kagii

MAP
CLICK!

tsumi-shima tsumishima.com
ダイバーの夢をつみあげていく島



(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp

© 2018
World Tour Planners Co.,Ltd.
All Rights Reserved.

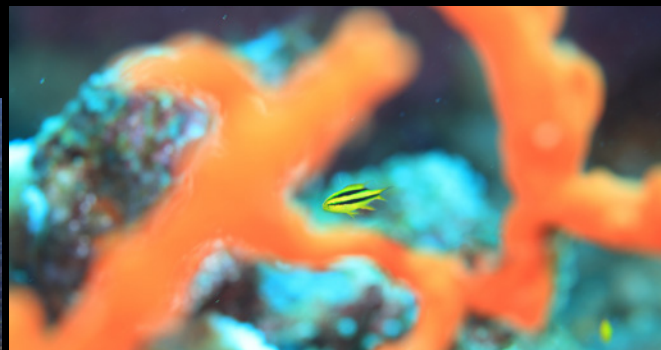




Travel Indonesia **Ambon** アンボン・インドネシア

まずは、海底レストランへ！

ダイブセンターの前の桟橋からボートは出発し、東の Haruku Strait 方面に。向かった先は、洋上から岩礁がうかがえるエリアの近くにある hard boiled。エントリーして、リーフとサンゴの隙間を泳いでいく。すると白い砂地からポコポコと泡が出ている。このポイントは、海底火山の影響で、そのように泡がたくさん湧き出ているのだが、面白かったのが、ガイドのアレンが生卵を数個持っていて、それを最も激しく泡が出るところに埋め、調理し始めた。待つこと約10分。取り出された卵は様々なゆで具合で、固めから半熟まで。私は半熟を口に放り込んだが、海水も一緒に口の中に入ったので、塩味の効いたワイルドな味わいだった。見所は、そのゆで卵だけでなく生き物も面白い。いろんな場所にウミウシは隠れ、可愛いギンボが、クルクルお目目でこちらを誘惑する。最後には擬態する大きなワニゴチとご対面して1ダイブを終えた。





華やかなHaruku Strait

2ダイブ目は、Pombo島へ向かう。ヤシの木など緑豊かな島で、南国の景色そのもの。エントリーしたのは、「pulan pombo I」真っ白い砂地の傾斜が美しいポイントで、リーフも緩やかに落ち込む。2本目ということで、視点も随分と落ちてきたので、ゆっくりと被写体探し。ガイド陣が、驚くほどゆっくり進んで行く。これはフォト派には最高のペース。ニシツノメエビなどの珍しいエビも見せてくれる。アジアの海の特徴だが、海底にはとにかくカラフルなサンゴやヤギが多い。魚影が濃いので、そこにお魚が絡んでくる。それが絵作りが行いやすい。特に今のアンボンがそれが大きな魅力だと思っている。最後、浅瀬に戻ってくると大きな赤いウチワの周辺は、無数のスカシテンジクダイとキンギョハナダイに囲まれていた。とても美しい景色だった。

3ダイブ目は、同じ Pombo島のポイント「pombo ls II」へ。浅瀬のサンゴの造形が美しく、まずはそこで立ち止まる。ジョーフィッシュにご挨拶した後、ウミシダの下にギンポとスズメダイを見つけた。何度かシャッターを切ると物語が生まれた。そして、可憐なミノカサゴの幼魚やホヤの上を歩く素敵なウミウシなどを撮影。最後は、サロンパスに小さなスマレナガハナダイが興味を持ち、お腹のあたりが青く、きっと婚姻色になっているギンポの脱糞シーンで締めくくる。忙しい1ダイブだった。



何度かシャッターを切ると物語が生まれた



憧れのアンボン湾へ！

Travel Indonesia
Ambon
アンボン・インドネシア

2日目は、アンボン湾でのダイビング。アンボンを一躍有名にしたのはこの町に近い湾で、人間生活のエリアでありながら、珍しいマクロの生き物がたくさん見つかるポイント。ダイビングセンターから車で、15分ほど移動。そして、専用の桟橋からスピードボートに乗り込む。約40分移動して、最初のポイントへ。まず潜り込んだのは、「kampung baru」というポイント。現地の言葉で、「新しい村」と言うらしい。黒い砂地のスロープ状のポイントで、環境的には、マクロの宝庫と呼び声の高いレンベなどにとっても似ている。ガイドのアレンが、次から次に生き物を紹介してくれる。まずは、砂地に擬態するハナイカ。そして小さなウミウシと続く。ウミウシに関しては、あまりにも小さいサイズすぎて、超マクロレンズでも撮影が困難なほど。こんな生き物を見つけるのだから、ガイドさんの眼力はさすがにすごい。それから、カイメンに擬態するエビカニなど。少し深場で、ドラム缶などのゴミが溜まった場所があり、そこが漁礁になっていた。ミノカサゴやウツボ、ハナダイなどが群れていた。人間生活の中にある自然を見つけることができた。



サイケデリックフロッグを探しに……

2本目はRhino cityへ。目的は、サイケデリックフロッグを見つけること。数日前にガイドのアレンが、サイケデリックフロッグを見つけたとのこと。是非見てみたいので、エントリーしてみる。ガイドは最初からサイケデリックフロッグ探しで、水深4mの棚の上でずっと探しているの、ゲストは各自、あまり離れない程度にばらけて、各々の生き物を探す。タデジマキンチャクダイやアカククリの幼魚などわかりやすい生き物だったり、やはりウミウシだったり。サイケデリックフロッグを探す途中に見つけたキンチャクガニなどをガイドのアレンに見せてもらう。結局90分ほど潜るが、サイケデリックフロッグは現れず……。また次回かな……。会いたかったな……。 (笑)。

3本目に潜り込んだのが、Laha3。満月のためか潮が速く、最初にハダカハオコゼ、そしてボロカサゴを見た後に、ビューン!と流される。マクロの生き物を観察するには、あまりにも流れているので、ガイドを含めてグループはみんなで流される。それでもマクロの生き物を見つけて、撮影しようとする。フォト派の執念もなかなかのものである。その後、小さなクリーニングステーションを見つけて、交代で、ホンソメワケベラにお掃除されるソメワケヤッコとタデジマキンチャクダイの幼魚などを観察。よく見ると、タデジマキンチャクダイの幼魚がかなり強く、ソメワケヤッコがクリーニングされ始めると、追っかけて追い出そうとする。幼魚なのに強いな、と感心。その頃には、潮の流れも落ち着き、ゆっくり観察することができた。昨年1度の取材では、なかなかわからないことも多いな、と。こんなに潮が速くなるとは想像もしていなかった。やはり取材を重ねて、できるだけそのエリアの日常をお伝えしないといけないと思った。

Travel Indonesia
Ambon
アンボン・インドネシア



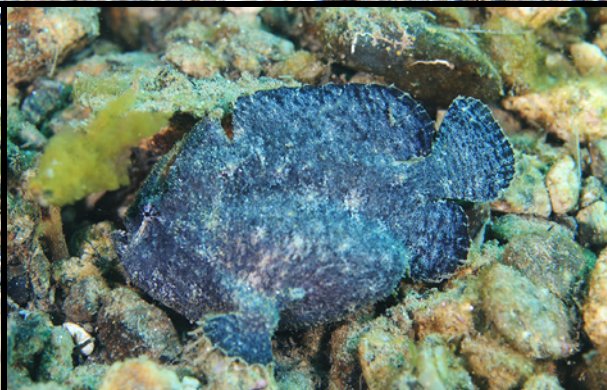


最終日、大きな期待を胸に アンボン湾へ！

潮の流れが早いということで、アンボン湾の対岸側（南側）で潜ることに。移動の方法は同じで、リゾートから少し車で移動して、また40分ほどボートで移動。ポイント名は、ERY。エントリーしてまずは砂地の奥の方に、小さな根までガイドのアレンが連れて行ってくれる。彼の指差す方向には、ボロカサゴが。紫色の立派な個体で、顔面からの迫力も凄い。私はその横にあるカラムツに夢中になり、ガラスハゼやジョーフィッシュを絡めて撮影。何気ない景色の中で、絵作りしている時間がとても楽しい。その後、米粒大のキャンディーのようなウミウシを見せてもらう。ボロカサゴに続いて、そのウミウシ……なんてポテンシャルの高い海なのだろう……。少し深度を上げていながら、青いホヤに産卵しようとするハゼを見つけたり、ガイドさんが、極小のカエルアンコウを見せてくれたり、それはそれは大満足の1ダイブとなった。



Travel Indonesia
Ambon
アンボン・インドネシア



「あれはミミックオクトパス！」

2本目は、amahusu beach にエントリー。明るい砂地のポイントで、マクロの生き物をお宝探しのよう楽しんでいく。まず水深を落として、ガイドのアレンがタコを見せてくれる。砂地を這うようにして移動していく。後から聞くと「あれはミミックオクトパス！」だと教えてくれた。もっとゆっくり観察して、いろんな擬態を楽しむべきだったかも。その後も、ガイドさんがいろんな生き物を見せてくれる。ハナイカ、チビの黒いカエルアンコウ&大きなカエルアンコウ、大小様々なサイズのタツノオトシゴ、ウミウシなどなど。予定の60分を超えて、70分もダイビングしたけど、まだまだ終わるような感じがしない。「ザ・アンボン」のようなマクロ三昧の1ダイブとなった。



お腹いっぱい ダイビングを終えた!

3本目のラストダイブ。選ばれたポイントは、love cave。海岸線に小さな穴があり、その前のポイントで潜る。エントリー直後に、カエルアンコウ。そして水深を下げて、ガイドのアレンが、ニシキフウライウオのペアを見せてくれる。撮影を終えて、次に、30センチほど横に居たジョーフィッシュを教えてくれる。口内保育しているのかな?と思っていたら、口いっぱいに砂利を頬ばっていた……。巣作りの途中? でも、そんな雰囲気はなく、口の中に砂を頬ばって、きょとんとしていた。そして、また私は動かないままで、2種類のヤギに擬態するフトガリモエビを紹介してもらおう……。もうここから動けない……状態に……。笑)。とんでもなくアイドル種が集まっている。そして、周囲で多かったのが、トオアカクマノミのコロニー。いくつも見つけることができた。中でも目を引いたのが、カラフルなスナインギンチャク。黄色、白、そしてお気に入りピンクだった。そんな風に、ここでしか見れない景色をいくつか見つけて、お腹いっぱいダイビングを終えた。



Travel Indonesia
Ambon
アンボン・インドネシア



2度目のアンボンでの ダイビング取材を終えて

まだ日本人ダイバーには有名ではないアンボン。インドネシアにありながら、知名度がイマイチなのが残念だと思うが、今の段階では、知る人が知る新しいダイビングディスティネーションだと思っている。欧米からのダイバーが多いようだが、まだエントリーするダイバーも他の有名エリアに比べては少ないので、手つかずのような海底、ポイントが多く見受けられる。今回、2度目の滞在となるマルクリゾート&スパは、Ambon bay と Baguala Bay の二つの湾にアクセスし易い位置にあり、これが大きな魅力となっている。リゾートに併設されている Dive into Ambon は、この2つの湾とその先に広がる広大なエリアでダイビングを楽しむことができる。Ambon bay はマクロの宝庫で、ある意味アンボンダイビングの醍醐味だと思う。また、Baguala Bay や Haruku Strait、そしてその先に広がるアウターリーフは、青い海の中、豊かなサンゴ礁や魚群、そしてここもマクロの生き物が豊富なので、Ambon bay とはまた違った、どちらかというよりカラフルな環境の中、マクロの生き物を楽しむことができる。今回は3日間のダイビング日程で、Ambon bay を2日間、Haruku Strait を1日楽しんだ。初めて訪れる方は、そのような割合がお勧めだ。前回の取材では潮の流れがほぼなく、どのポイントもゆっくり楽しめたが、今回は満月周期にあたり、Ambon bay のマクロポイントもかなり流れていたもので、少し撮影に苦勞した。もし可能ならば、満月、新月の周期も確かめて、アンボンに行くのが良いのかもしれない（閉鎖的な湾で、読み通りにはいかないかもしれないが）。そんな状況の中でも、滞在中は、ガイド陣が潜るエリアを変えてみたりして、気がつくと十二分にダイビングを楽しんで、取材を終えることができた。2度目のアンボン取材を終え思ったことは、やはりここはまだ手つかずのマクロの生き物の宝庫。3日間のダイビングでは全然満足できない、ということだった。

今回お世話になった リゾート&ダイビングサービス

マルクリゾート&スパ

空港から送迎車で40分。街の中をくぐり抜け、大通りから海岸線に入ると緑豊かな敷地に素敵なリゾートを見つけることができる。敷地内の中央には、海を見渡せるプールがあり、それを囲むように、ダイビングセンターやレストランが並ぶ。客室は3タイプあり、デラックスコテージ、シービュースタジオ、デラックススタンダードがある。白を基調とした清潔感のある室内で、広さも十分にある（客室には、冷蔵庫はない）。海を眺望できるレストランは光に溢れている。朝はビュッフェスタイルで、夜はセットメニューだが、メインはビュッフェスタイル。基本的にはインドネシア料理だが、味付けは日本人にも合い、美味しく頂くことができた。滞在中は、ダイビング以外は、リゾートから出ることはなく、コンパクトにのんびりと滞在を楽しむことができる。



Dive into Ambon

優しいカイと陽気なパーブ夫妻がオーナーのダイビングセンター。ゲストの人数にもよるが、毎日、Ambon bay 側と Baguala Bay、Haruku Strait 側からポートダイビングを展開する。通常は、8時15分にリゾートを出て2ダイブ。ポートの上、もしくは無人島に上陸してランチ。そして1ダイブして、リゾートに戻ってくるのが5時ごろになる。オプションでナイトダイビングも開催している。2年続けて、ガイドのアレンとジェフにガイドを担当してもらったが、米粒ようなマクロの生き物から、ミミックオクトパスやボロカサゴなどの少し大きめの生き物まで、バッチリ見つけ出す眼力のある素晴らしいガイドさんたちだった。

